彫刻

2026年　第89回新制作展
「作家のひとりごと」
（会員有志　＋　入選作家）

会員のひとりごと （あいうえお順）

雨宮　透
今回も身近な自然に目を向け取り組みました。私だけかもしれませんが、歳を重ねてくると過去を振り返ることが多くなります。「宙・2026」と「めばえ」はそうした日常の私の「思い」から生まれた作品です。心の内にある今は亡き人と成長して行く子、それぞれをイメージしながらの制作でしたが、今更ながら「生命」表現の難しさを強く感じた次第です。これからも挑戦して行きたいと思います。

飯田昌史
粘土を石膏に置き換える作業、石膏取りで外型を大破させてしまった。油断していた。いつもの機械的作業が突然悩ましいパズル的創造的作業になってしまった。怪我の功名を狙って試行錯誤してみたが、そんなに甘くはなかった。なんとも後味の悪い出品となってしまった。これまでとは別の意味で記憶に残った。

池田雅彦
身近な風景を実感できることをテーマに制作しています。そして私にとっての彫刻、木の形です。、

稲角新平 「cyber voltage 」 H 81 × W 75 × D 48 cm 材質：チューブ、ワイヤー、ポリマークレイこの形態は、内部に蓄積されたものが、もはや完全には留まれなくなった状態を示している。それは爆発や解放として現れる以前の、まだ制御が保たれている時間に属する。表面に現れているのは現象そのものではなく、その兆候や痕跡である。外部へ向かおうとする力は確かに存在するが、全体としては抑え込まれ、静止している。異常は全身に広がるのではなく、わずかな偏りとして留められている。この作品は、何が内包されているのか、あるいは何が解放されようとしているのかを特定しない。ただ、完全な封じ込めがすでに成立していないという状態のみを提示する。留まらず、しかしまだ起きていない。
その不安定な均衡の中に、この形は存在している。
This form presents a state in which what has accumulated within can no longer remain fully contained. It exists in the moment before release or collapse, where control is still intact, yet no longer absolute.What appears on the surface is not the phenomenon itself, but its traces and indications.The force moving outward is present, though restrained, held in a temporary suspension.Irregularities do not spread across the entire body, but remain localized as subtle deviations.This work does not define what is contained, nor what may be released.It presents only the condition in which containment has already begun to fail.Unable to remain contained,yet not yet undone,the form persists within this unstable equilibrium.
稲角新平 『abyss prisoner | 深淵の囚人』 H 81 × W 75 × D 48 cm 材質：有刺鉄線、ポリマークレイ
心の奥底に囚われた人物を表現した作品である。全身を有刺鉄線によって縛りつけられた身体は、精神的、身体的に追い詰められ、逃れることのできない状態にある。その一方で、鼻から口元にかけて露出した生身の部分には、病的な顔色と歯や歯茎の血色、滲み出る血が残されている。そこには、傷つきながらもなお存在し続ける人間の生々しさが現れている。
「深淵」は、誰の心の奥にも存在し得る場所である。人は誰しも、自らの弱さや苦しみから完全に逃れることはできない。
だからこそ、その弱さを否定するのではなく、寄り添い、救いの手を差し伸べることのできる存在でありたい。
This work depicts a figure trapped within the depths of the mind.The entire body is bound tightly in barbed wire, suggesting a state of both physical and psychological confinement from which there is no escape. Yet a small portion of the living body remains exposed—from the nose to the mouth. The pallor of the skin, the discolored teeth and gums, and the traces of blood evoke a disturbing, pathological presence. At the same time, this exposed flesh retains the raw vulnerability of a human being who continues to exist despite being wounded.
The “abyss” is a place that may exist within the depths of anyone’s mind.No one is entirely free from their own weakness and suffering.For this reason, rather than denying such vulnerability, I hope to be someone capable of recognizing it, standing beside it, and reaching out a hand of salvatio.

稲角新平「voidwing | ヴォイドウィング」 H 15 × W 34 × D 18 cm 材質:ワイヤー
35cm立方という限られた空間を、単に作品の大きさを制限する条件としてではなく、その内部から新たな彫刻表現の可能性を探るための場として捉えた。モチーフとしたのはコウモリである。複数のワイヤーによって身体を構成し、翼を広げた姿を極細のテグスによって空中に浮遊させている。台座を用いず、支持するテグスを視認しにくくすることで、作品は「置かれた物体」ではなく、空間の中に現れた存在として立ち現れる。密集したワイヤーによる身体と、光を透過する軽い翼、その周囲に広がる余白によって、物質と空間の境界を曖昧にする。また、作品は見る位置によって形態が変化する。正面だけでなく、側面や斜めから見ることで翼の広がりや重なりが異なって見え、観者の移動そのものが作品の見え方を構成する。35cm立方という限られた領域の中に作品を収めながら、その周囲に広がる見えない空間や、観者の視線、移動までを作品の成立条件として取り込む。翼によって切り取られた空間と、その周囲に広がる余白を一体として捉えることで、彫刻が占有する「物」としての領域を越え、空間そのものを表現として扱う可能性を試みている。
I approached the limited space of a 35 cm cube not simply as a condition that restricts the size of the work, but as a site for exploring new possibilities in sculptural expression from within that confined space.The motif is a bat. Its body is constructed from various wires, while its wings are spread and suspended in midair by an extremely fine, nearly invisible monofilament line. By eliminating the pedestal and making the supporting line difficult to perceive, the work emerges not as an object that has been placed somewhere, but as a presence appearing within space. The densely constructed wire body, the lightweight wings that allow light to pass through them, and the empty space surrounding the work blur the boundary between material and space.The form of the work also changes according to the viewer's position. From the front, side, or an oblique angle, the spread and overlapping of the wings appear differently, making the viewer's movement itself part of the way the work is perceived.While keeping the work within the limited volume of a 35 cm cube, I incorporate the invisible space surrounding it, as well as the viewer's gaze and movement, as conditions essential to the work's existence. By treating the space defined by the wings and the surrounding emptiness as an integrated whole, I seek to explore the possibility of sculpture extending beyond the realm of the "object" it occupies and treating space itself as a medium of expression.

岩間弘
「鳥人、再生の鳥、小さな大飛行、青の空間、宙を行く、星の住処、羽化、探索船」 空を見ている日々は続いている。

江村忠彦
「黎明」は夜明けを意味するが、新しい物事の始まりをも意味する。本作は裏側から作られた。その制作行為はまるで暗中模索であり、目の前の草をかき分けて進むような冒険だ。その先に何があるかわからない。未来を突き進むとは、それ自体が創造であり黎明である。

大西康彦　　墨人・幸三
週2回のディケアは自分の甥の行く末を見せつけられる場でもある。計画通りに進まない制作、無理がきかない身体、何よりも機能しなくなった"あたま"でいつまで仕事を続けられるのだろう。そんな状況の中で出会ったリハビリ仲間をモデルにした作品がやっと完成した。題名は「さあ出かけるか！」に決め英訳を Time to Set Out とした。
英文には"人生の新しい階段へ進む"との象徴的な意味も含むとChat GTPはいうのだが一。

岡孝博
2015 年より約 10 年間 RAIL WORK シリーズとして鉄道レールや船上で使用したレール、エレベーター用など様々なレールを使用し制作している。レールの持つ直進性や永遠性を感じ、様々に組合せながらイメージに近づけたり、新たなイメージがうかんだりとレールと関わりながら制作をつうじ楽しい時を過ごしている。

笠井利彦　　『 幻 』(風)
時の経つことの何と早いことか。遠い昔、遥かな昔にめくるめく過ごした、幼い日の充実感。あの毎日は、二度と戻らない。しかし、過ごした遥かな時間と思い出は、繰り返し私の脳裏に『 幻 』のように浮かび上がる。情感を伴うその『 幻 』は、微かに聴こえるヴァイオリンの音色のように、静かに、そして刹那い気配を纏って心へと広がっていく。針金のような頼りなさで、触れる肌も持たず、風すらもただ吹き抜けていく私の彫刻。然し、私は具象作家を自負する。たとえ肉も血も無くなろうとも其処に立ち、どんな風に吹かれようとも、些かも揺るぎなく立つ『 人 』の存在を、どうか感じてほしい。一瞬でも足を止め、目を留めてくださる方がいらしたら、私の『 幻 』のような人体に、何を見てくださるのだろう。思い出の "あの人" か、それとも、気丈に優しく守ってくれた母親か…。貴方の心に浮かび、像を結ぶその姿。其処にこそ、私の彫刻がある。その姿には、私が造ろうにも創りきれない、追いかけても追いつけない『 歌 』があり、その姿にこそ、確かな『 美 』が生まれる。
Title: "Illusion"Subtitle: (The Wind)Looking back, how incredibly fast time flies.Long ago... in the distant past... I can still faintly feel the dazzling sense of fulfillment from my childhood days.Those days will likely never return.Yet, in my mind, the vast memories of time spent repeatedly surface like an "illusion."This emotion-laden illusion expands quietly within my heart, carrying a poignant, bittersweet presence—much like the faint, distant strain of a violin.Wire-like frailty... no skin to touch... the wind will simply blow right through my sculpture.And yet, I pride myself on being a figurative artist.Even if flesh and blood are lost, it stands there. No matter how the wind blows, I want you to feel the unyielding presence of the "human being" standing without the slightest tremor.If someone should pause even for a moment to look at my work, what will they feel from this illusion-like human form?Will it be "that person" etched in their memory? Or the mother who protected them with both resilience and tenderness? Or perhaps...The figure that rises and takes shape within your own heart—that is where my sculpture truly exists.In that figure lies a "song" that I could never fully capture, a song I can never catch up to no matter how I pursue it. And in that very form, a definitive "beauty" is born.

加藤裕之
言葉は嘘をつく。だから僕は、手触りや手応え、身体で感じるものを信じ、ものとのやり取りの中に真実を求めてきた。それが僕の制作態度。未知に出会い、新しい自分に出会うことであると信じてきた。最近は、言葉もまた、僕を未知の場所へ連れて行くと思い始めている。いずれにせよ、どちらもそうあてにはならないだろう。だから僕は、そのあてにならないものたちの間を行ったり来たり、揺らぎながらもまだ何かを確かめようとしている。

河合睦子
創りたいなあと思うポーズに出会いました。それが今迄の自分に無かった形だったので造ってみょうと思ったのです。それは挑戦であり、変化を求めて自分を包む殻を内側から破ろうとするとでした。苦戦していたところタイミングよく外から殻を破り筋道を付けてくれたもう一人の自分がいました。一人「啐啄ソッタク」してしまいました。

木方立樹
発生や生成の過程、働きと影響の提示　MorfiはMorphology(形態学)の語源(ギリシャ語※英語表記)で形、Chroma は色
「胡桃の木　キャンバス　胡桃色素　胡桃油　油絵の具　アクリル絵の具　他」

久保制一　garden　−ひとりじゃないー
この星の自然と人間との境界域としてのgarden。人間が自然から多くの恩恵を受け豊かなもみのりを享受しつつも、自然の破壊と収奪の限りを尽くしてきている。どうにかならないのか！と呟いたり叫んだりしてみても個人ではままならないようにみえる。gardenに集い憩う人々の心と魂、そして自然が持つ力に、もしかしたら希望があるかもしれない。そう、ひとりじゃない･･･から。

小嶋満明
職務上、葬儀社の車を施設玄関先より合掌一礼で「ご冥福を!」とか「ご加護を!」などと念じ見送ることがあり、その方角に諏訪湖と富士山が遠望できます。こんな光景が言わば醸成して制作に繋がった気がしています。

小柳順　**重い方をとればいい**
曲に合わせダンスをしている動きを表現している。飛んだり跳ねたり、重力を感じさせないほど動いている瞬間を感じてほしい。この作品は前から作りたいと考えていたが、よい形の材料が見つからず諦めていた。なんとか落とし込めそうな材料が見つかり試行錯誤しながら一木で接ぎ木せずに完成させることができた。

小柳力
以前、野山に遊びに行き、昆虫取りや山葡萄、アケビ等取りながら遊んでいた時、一点から3メートルくらいの炎が「ボー」と言う音と共に青空に立ち上り、びっくりしたことが何度かありました。仲間の一人にあれは、「狐火」と言うんだと言われ、今でも不思議な体験であったと思っています。その驚きを彫刻にしたものです。

酒井良
高校生の時、10年ほど先輩になる方から突然「わたしが教わった先生は前の学校で草間彌生を教えた人だ。当時のことを知りたかったら電話をしてあげる。」といわれ飛びついた。彫刻の勉強を始めた頃、フジテレビギャラリーで草間さんが個展をしているのを知り伺った。挨拶をして高校時代の話をすると嬉しそうにいろいろ話をしてくださった。握手をして励ましていただき満ち足りた気持ちになった。想い出は今でもわたしのエネルギーになっている。

瀬辺佳子
「海の祭祀」は、以前からも「森番」「泥守り」といった、その場所を守る妖精のような怪物のような、造形作品を作ってきました。今回もそのうちの一つです。汚れていく海を守ってくれとの希望を込めて。
『道標』もう道の迷ってしまってどっちに行っていいやら、「カラスにでも聞いてみるか」と言った心境で。

高野正晃
久しぶりの出品になります。色々な事が重なり、制作できる環境にありませんでした。制作をしていない自分が大学で学生に指導するという、何とも耐えられない心の葛藤があります。この夏どうにか時間を作り、この作品を作りました。やっぱり制作は楽しいな。本当に楽しい。いつまでも、いつまでも、この時間が続いてほしい。

田中和之
今年は、制作前から腰痛の悪化で歩くのも困難な日々が続きました。正直、出品を諦めていましたが、8月頃から制作ができるくらいに回復し、なんとか出品まで辿り着くことができました。あらためて彫刻ができることに感謝です。

土井宏二
いつの頃からだろう。守られていた環境から、徐々に外の世界へと足を踏み出し、彼女が心の中にたくさんのものを抱えだしたのは、小さな温かい感情や喜び、それ以上に多くの痛みや悲しみが、やがて、抱えきれないほどに大きくなった心の闇は、、、

中谷聡　「時のカプセル・内と外15」
「四角い原石の中央を、ひたすら穴を続けて開けて、四角くくり抜いて、外に取り出してみました。すると、取り出された一回り小さな四角い石は、側面に無数の掘り跡をまとって、全く新しい立体となって出現して来たのです。さらに、残された元の原石も、内側に同じ無数の掘り跡を残して、虚の空間を内包した全く新しい立体に姿を変えていたのです。この不思議な感覚と体験は、内とは何か、外とは何かを問う新しい立体空間の誕生のように思うのです。皆様は、この二つの立体をどのようにご覧になられますでしょうか。作品の周りをぐるっと廻られて、どうぞ、ごゆっくり、お楽しみ下さいませ。」
中谷聡　「時のカプセル・流星」
「この四角い石は、一見、一つの石に見えるのですが、実は、真ん中で水平に割られて、中がくり抜かれて、カプセル状になっているのです。もしかすると、宇宙から地球にやって来る流れ星たちも、考えようによっては、何億年もの時を内包したカプセルと言っても良いのかもしれません。そんなことを想像しながら、ご覧頂ければ幸いです。」

長谷川喜男　「芽吹き人」
植物が大地から芽吹き始める営みと人間が内に秘めた力を新しい一歩として踏み出そうとする姿を重ね合わせ「芽吹き人」として表現しました。
長谷川喜男　「ハートを運ぶ鳥」
空を飛ぶものは、夢や希望を与えてくれる。しかし、空を飛ぶものが恐怖となることが起きている。「ハートを運ぶ鳥」が^夢や希望そして平和へとつながることを願ってつくりました。

菱田波
2つの石は同じ石です。荒削りな石の上に細長い石が乗っています。上と下の石を支える設置面はわずかです。不安定ながらもしっかり支えています。目標に向かいぐらつきながらも静かに確実にまっすぐ進んでいく様子を表現しました。石という素材は硬質ですが、色々な表情があり魅力的な素材です。日々対話しながら制作しています。

人見崇子
Uum.
What are you going on ?　What are you doing now?　THIS is a runner free way of the wind and the sunshine flowers .or ″the Inufuguri ～Japanese of name ～″...maybe I don't know. Do you know?
What are you going on?　Why are you doing now ?　I am still thinking.

本田悦久
　フィギュアという言葉を初めて目にしたのは、イギリスの彫刻家ヘンリームーアの作品を見たとき、そのそのフォルムとはすぐに結びつかなかったが、のちに都内で開催された大回顧展で実際に目にすることができ、フィギュアを実感できた。いつか自分でもフィギュアと呼べるような具象から脱した彫刻を作りたいと思い描いたが、ついにその変革は起きなかった。方向性が僕とは違っていたのかもそして今世の中のフィギュアはように感じている。

牧野未央　　「poet unknown」
「他のポーズは作らないの？」昨年の会場で仲間に貰った言葉がきっかけで今年は坐像にしました。2体の配置を考えていた6月、偶然立ち寄った東寺の立体曼荼羅からヒントを頂きました。空海上人はすごい、もっと知りたいなと思いました。
タイトルの「poet unknown」は「詠み人知らず」に重ねています。私の作品も名前や意図に関係なく、誰かの心に残るような存在になれたら、と思っています。

松枝源太郎
この社会は、人を記号として扱おうとする。人は微かな、けれども重大な違和感を抱えながら生きているのではないか。
私もその社会の一員だけれど、人をつくる時くらいは、そこにいるその人と、ただ向き合いたいと思う。

松本弘司　ー大地(生きる・まだ見ぬ者たちへ)ー
今(2026年)の世界を見ると、100年先、いや50年先の人達が、無事生きて居られるのか不安になる。核の問題、地球の温暖化(沸湯しているとい言っても良い位の)それをフェイクと言って片づける者AIが人類を超え、人を消してしまうかもしれないという恐怖。そんな中、8月終わりの大雨警報の中、必死に鳴いているミンミンゼミがいる。彼らの次の世代への叫びのようで、心に突き刺さる。自分のつくったものに、そういう熱いモノが有るのか。改めて我が作品を見る。

渡辺尋志　　ねむり猫
今年、日光東照宮に行ってきた。左甚五郎作「ねむり猫」を見るのは中学校の修学旅行以来で、記憶にあるモノより小さな猫だった。しかし、その作品に込められた想いは「平和」だということを説明書きで知った。近年大国のトップが「平和」を脅かして全ての生き物の命を軽んじている。猫が安心してベンチの上でうたたねができるそんな世界を望みたくて制作した。